

## 中国における「別号文学」の萌芽

―「五柳先生伝」の誤読が生んだ文学―

柴田寿真

### 一、はじめに

中国古代の作家の中に、名字のほかに別号をもつ者が少なくないことは、すでに周知の事実といつてよい。しかしその中に、自身の号を自身が創作した著作中に登場させる作例を系統的に残した人が存在することは、必ずしもよく知られてはいない。さらに、それが悠久の歴史のなかで絶えず新たな特質を取り込みつつ、甲から乙へ、乙から丙へと脈々と受け継がれて、一つの系譜を形成している事実は、なおさらよく知られていない。今、自作中に自身の号を参入させる表現手法を「別号表現」と仮称し、この手法によって一篇を構成した文学作品、ならびにそれらの総体を「別号文学」と称す。

筆者は北宋の蘇軾（一〇三七―一一〇一、字子瞻、蜀眉山の人）の文芸を主たる研究対象とするが、古今中外の別を問わず、蘇軾は諱の「軾」よりも、別号の「東坡」で呼ばれることの方が一般的である。

この事実が示唆するように、「東坡」という別号は彼の文芸においてすでに不可分の要素として内在化されている。言うなれば、本稿で規定するところの「別号表現」を、中国詩歌史上、初めて自覚的かつ系統的に用いた詩人が蘇軾であり、彼こそが中国「別号文学」を大いに発展させた第一人者にはかならず、このことが巡りめぐって「蘇東坡」という呼称の安定感を根底から支えている、と筆者は考えている。

ただし、蘇軾以前に「別号表現」や「別号文学」が全く存在せず、蘇軾に至って忽然とこの文学現象が誕生したわけではない。別号の起源は古く、別号が使用された時間は、中国文化史の長さそのものに匹敵するといつても過言ではない。その長久の歴史の中で、蘇軾に至るまでに、大きな転機が複数存在している。筆者が思うに、最初の転機は魏晋六朝期にあり、二度目は唐代、そして三度目が蘇軾の時代、北宋中後期にある。そして、前述の「別号文学」という観点からいえば、萌芽期（六朝）、確立期（唐代）、発展期（北宋）と言い換えられる。

本稿では、序や史伝等、非文学系——虚構よりも真实性を強調する——作品の中で用いられた初期の「別号表現」が、虚構性豊かな文学作品の中で自覚的に用いられ「別号文学」として成立する唐以前の時代、すなわち萌芽期に焦点を当て、それがどのように文学表現として成熟していったのかについて考察することを主たる目的とする。とくに、陶淵明の「五柳先生伝」は「別号文学」の祖とも言うべき重要な位相にある作品である。本作は『宋書』以来、長らく陶淵明の自伝作品と見なされてきたが、近年、嵇康や皇甫謐の『高士伝』の影響を指摘されている（第四節後述）。本稿ではその近年の指摘に基づいて再検証を試みる。そして「別号表現」という観点からも、なお本作が自伝作品たりえないことを改めて指摘するとともに、「五柳先生伝」がどのように「別号文学」の確立に寄与したかについて考察する。

## 二、別号の起源

まず別号の発生起源について整理しておきたい。清・葛万里（清初の人、生卒年未詳）『別号録』九卷<sup>(1)</sup>の四庫全書総目提要（『四庫全書』子部十一類書類）と清・章学誠（一七三八—一八〇二）『文史通義』卷四（内篇四「繁稱」）に関連の記述がある。

『別号録』の四庫提要は、商山四皓（秦末に商山に隠れ住んだ四人の隠士）に「其れ別号の仿ふ所なるか（其別號之所仿乎）」と言及し、「四皓」それぞれに別号らしき呼称のあるため、これが別号のはしりではないか、と推察している。一方『文史通義』は、春秋・戦国に端

を発すると見なし、例として、春秋末の范蠡（越が呉を破った後、越を去り「鴟夷子皮」と称して跡をくらまし、後、「陶朱公」と称して大富豪になったと伝えられる）、戦国楚の鶡冠子（姓名未詳）、戦国の鬼谷子（姓名未詳）の三者を挙げる。

両説について、まず「四皓」各々の呼称は、自号（自ら称した別号）か定かではない。後の別号は基本的に自号のため、その点はむしろ彼らよりはるか前の范蠡の方が、性格を一にしている。ただし、後世の別号は次節で述べるように、著述や文芸活動と直結しているので、范蠡の例はこの点において大きく異なる。残りの二者は言論と深い関わりがあるものの、氏索性が全く分らないため、保留にせざるを得ない。しかし、右の二書によって明らかないように、特定の個人から別号の歴史が始まった、という定説は存在しないようである。一つ言えることは、范蠡であれ、鬼谷子であれ、その起源は先秦にまで遡り、現存の史書で遡れるほぼ上限といってよい昔から、後の別号に連なる呼称法が存在していた、という事実である。

また、起源に関連してもう一つ指摘すると、別号をもつ人物は一体に隠士が多い、という明確な傾向がある。范蠡の後半生を始め、鶡冠子、鬼谷子、さらに四皓を加えても、政治の表舞台から離れた隠士であった。このように、別号の風習と隠逸との間には高い親和性がある。では、なぜ別号と隠逸には深い関わりがあるのだろうか。それは以下のように合理的に説明できる。つまり、隠逸とはそもそも権力機構から意図的に距離を保ち、我が身の保全を図る行為であり、そのた

めに跡をくらし、つとめて氏素性を隠そうとする。しかし、第三者が彼らを呼ぶためには便宜上ニックネームのようなものをつける必要がある。おそらく別号と隠士の密接な関わりは、姓名不詳の人物に對する、このような命名のメカニズムから起こったと考えられる。

そして、隠士に便宜上別号をつけることが一般化してくると、今度はその呼称——地名や身体・思想的特徴をそのまま命名したような素朴な呼称——がむしろ隠士の呼称と見なされ、ひいてはそれを名乗ることが、隠士としての態度を表明する一手法となった、と考えられる。

先秦の諸例は関連の資料に乏しく、彼らの使用意図を含め詳細な背景は殆ど分からない。よって、彼らを、十一世紀以降、盛行し一般化する別号の遠い祖と見なすことはできても、直接つながる祖と見なすことは難しい。趙宋の別号に直接連続する淵源をあえて一人だけ挙げると、それは次節で述べる魏晋の人、皇甫謚<sup>(4)</sup>であろう。

### 三、「別号表現」の濫觴——魏晋六朝期の別号

皇甫謚<sup>(4)</sup>（二一五～二八二）、字は子安、自ら玄晏先生と号した。生涯仕官せず、著に『歴代帝王世紀』『高士伝』『逸士伝』『列女伝』等のほか現存最古の鍼灸の專著である、『針灸甲乙経』がある。

魏晋の時代、政界には数々の陰謀がうずまき、知識人は「竹林の七賢」に代表されるように、多くが韜晦的言動を採った。政治闘争に巻き込まれるリスクを負いつつ官界に留まるよりも、隠士として野に在ることの方が身命を保全し精神を開放できるため、合理的な選択でさ

えあつた。このような時代にあつて自らを隠逸者として対外的に示す

必要が生じるのは自然の流れでさえあり、かくて自ら別号をつける行為が起きたのであろう。皇甫謚のほか、稽含<sup>(5)</sup>（二六三～三〇六、毫丘子<sup>(6)</sup>と号す）、葛洪<sup>(7)</sup>（二八四～三六四、抱朴子<sup>(8)</sup>と号す）、そしてややおいて陶弘景（四五六～五三六、華陽隱居と号す）が別号を名乗った。

この四人については、本人もしくは第三者の記述から自号であることが確実に分かる。たとえば、皇甫謚の場合、『晋書』（卷五十一、皇甫謚伝）に「著述を以て務と為し、自ら玄晏先生と号す。（以著述爲務、自號玄晏先生）」と見える。また、「三都賦序」（『文選』卷四十五）冒頭の「玄晏先生曰」に附す李善の注は、皇甫謚の「自序」を引き、そこには「謚の自序に曰く、始めて学に志し、而して自ら玄晏先生と号す、と。（謚自序曰、始志乎學、而自號玄晏先生）」とある。

葛洪も『抱朴子外篇』に「自叙」一篇を設けて自らの経歴とともに「抱朴子」と号した経緯を記している。

……洪之爲人也、（脱文あり）而駭野。性鈍口訥、形貌醜陋。而終不辯自矜飾也。冠履垢弊、衣或纏縷、而或不恥焉。俗之服用、俄而屢改、或忽廣領而大帶、或促身而修袖、或長裾曳地、或短不蔽脚。洪期於守常、不隨世變。言則率實、杜絕嘲戲、不得其人、終日默然。故邦人咸稱之爲抱朴之士。是以洪著書、因以自號焉。……

……洪の人と為りや、……駭野（頭が鈍い）なり。性鈍口訥にして、形貌醜陋なり。終に自ら矜飾するを弁ぜざるなり。

冠履垢弊（汚れていたり破れていたりする）にして、衣或ひは纏纒（ポロ）なれども、或ひは恥ぢず。俗の服用も、俄にして屢しば改め、或ひは忽ち広領（広く開いた襟首）にして大帯、或ひは促身（身体を締め付けるように小さく）にして修袖（長い袖）、或ひは長裾にして地に曳き、或ひは短くして脚を蔽はず。洪守常を期して、世変に随はず。言は則ち率実（正直）にして、嘲戯を杜絶し、其の人を得ざれば、終日黙然たり。故に邦人咸な之を称して抱朴の士と為す。是を以て洪が書を著すや、因りて以て自ら焉を号す。……

右の引用のなかで「因以」の語に注目したい。「著書」という行為が「自號」の原因・理由となっている。この点は皇甫謐の「以著述爲務、自號玄晏先生」という部分とも共通している。

さて、前掲四名のうち、稽含を除く三名が自著の中で別号を使用している。皇甫謐は先ほどの「三都賦序」のほか四作品<sup>8)</sup>、葛洪は三作品<sup>9)</sup>、陶弘景は四作品<sup>10)</sup>での使用が確認できた。このうち、陶弘景の「授陸敬游十寶文」「本草序」以外はすべて「抱朴子（答）曰……」や「玄晏先生以爲……」のように使われている。「曰」と「以爲」には訳語上の違いはあるが、自身の見解を導くという点で、文における機能はほとんど同じと見なすことができる。以上をふまえると、自説を開陳する際に用いるのが初期の「別号表現」の基本用法と見なされる。

しかしなぜ、自説を展開するに当たり、わざわざ別号を使用したのであろうか。この疑問については、筆者は今のところ、自説を客体化

して提示する工夫と考えている。つまり、主観的な持論も、あえて別号を用いることにより、第三者的視点が確保され、あたかも客観性の担保された主張のように見せかけることができる。

また、『抱朴子』によく見られる、論客との問答を通して考えを述べる方法は、漢賦に見られる仮設問答の形式を想起させる。ただ、これらの問題については、別号の問題というよりは、人称視点もしくはナラティブの問題とも考えられ、本論の趣旨からいささか離れるので、本稿では論じない。ここでは、さしあたり初期の「別号表現」が概ね自説開陳のために使用されていた事実を指摘するに止めておく。

本節の最後に、初期の「別号表現」の例外的現象と見なされる、陶弘景の「本草序」について触れておく。

隱居先生在於茅山巖嶺之上、以吐納餘暇、頗遊意方技、覽本草藥性、以爲盡聖人之心、故撰而論之。……

隱居先生 茅山巖嶺の上に在り、以て余暇に吐納し、頗る意を方技に遊ばしめ、本草の藥性を覽、以て聖人の心を尽くせりと爲し、故に撰して之を論ず。……

右の例では、先述した自説開陳の用法とは明らかに異なる用法で「隱居先生」が使用されている。陶弘景に見られるこのような「別号表現」は、唐代以降、基本的な用法に転じるが、この例にその兆しがすでに現れ出ている。陶弘景がなぜこうした用い方をしたのか、確かなことは分からないが、本節で採り上げた皇甫謐（二一五～二八二）・葛洪（二八四～三六四）等、最早期の別号使用者と陶弘景

(四五六―五三六)の用例の間に、陶淵明の「五柳先生伝」が存在する事実は見落とすべきではないであろう。「五柳先生伝」が陶弘景の用例に何かの影響を与えた可能性のあることを指摘しておく。次節以降、「別号表現」と文学との距離を一気に縮めた記念碑的作品、陶淵明の「五柳先生伝」を採り上げ、関連の諸問題について論ずることとする。

#### 四、陶淵明「五柳先生伝」——「別号表現」の新展開

(一) 陶淵明「五柳先生伝」は自伝か？

「別号表現」の系譜を辿るに当たって、陶淵明(三六五―四二七)の「五柳先生伝」(以下「本伝」と称す)は、後世に与えた影響の大きさという点から、とうてい無視することのできない作例である。本伝は『宋書』(卷九十三、隱逸伝)の陶淵明伝に引用されて以来、陶淵明の「実録」(≡自伝)としばしば見なされてきた。しかし、登場人物である五柳先生と筆者陶淵明の関係について、作品内では何一つ明示されていない。それどころか、冒頭は「先生は何許の人なるかを知らず。姓字を詳らかにせず(先生不知何許人。不詳姓字)」というように素性がまったく分からないという破格の書き出しで始まり<sup>(11)</sup>「此を以て自ら終はる(以此自終)」と、その人生が完結したことまで明記され、真に自伝ならば書き得ない文言によって結ばれている<sup>(12)</sup>。しかも、陶淵明の他の作品には、「五柳先生」はおろか「五柳」という語

すら出てこない。本伝を自伝とすると、「五柳先生」は陶淵明の別号ということになるが、その場合、前節で確認した「別号表現」の特徴——自説開陳——と比べて著しく異なるという大きな問題が残る。

では、「実録」とするに足る証拠が充分なのかというと、決してそうではない。現在これを「実録」とする根拠は、本伝を載せる『宋書』の記述があるくらいで、しかもその記述も「嘗て五柳先生伝を著し、以て自ら況ふ(嘗著五柳先生傳、以自況)」、「其の自ら序ぶること此のごとし。時人之を實録と謂ふ(其自序如此。時人謂之實録)」と記すように、「宋書」の撰者沈約は、陶淵明が自身を五柳先生に擬えたと述べてはいるが、「実録」と断定しているわけではない。

しかし近年、「五柳先生伝」≡自伝説に疑義を呈する研究が、日本と中国で現れた。もつとも早く一石を投じたのは小川環樹氏で、小川氏は、劉向(前七七―前六)の『列仙伝』、嵇康(二二四―二六三)ならびに皇甫謐の『高士伝』と形式や表現が類似することから、本伝を「高士伝」のパロディとし、五柳先生を陶淵明の理想像とする新説を主張した<sup>(13)</sup>。その後、石川忠久・川合康三<sup>(14)</sup>・一海知義<sup>(15)</sup>の各氏も同様に『高士伝』の影響を追認し、この説を支持している。中国でも、于湖・卞東波の両氏が、右の研究成果を取り入れ、やはり『高士伝』の影響を指摘する<sup>(17)</sup>。とくに川合・于・卞の三氏は「五柳先生伝」と形式の似た袁粲(四二二―七八)の「妙徳先生伝」が、『宋書』(卷八十九、袁粲伝)に、「常て『妙徳先生伝』を著はし、以て嵇康の『高士伝』を続ぎ、以て自ら況ふ(常著妙徳先生傳、以續嵇康高士傳、以自況)」

と記されている事実にも着目し、『高士伝』の影響を受けているという説により説得力をもたせている。

なおこの中、石川氏と卞氏が本伝を非自伝作品とする見解を示している。その他は『高士伝』の影響を指摘しはするものの、完全なる非自伝作品とは見なさず、虚実皮膜の半自伝的作品という解釈をしている。しかし、ここでは結論を急がず、今一度、本伝を努めて陶淵明当時の文体的伝統の枠組みの中に戻して再検証を試みたい。

## (二) 自伝の系譜

本伝が自伝であるか否かを考えるにあたり、そもそも伝統的な自伝というものはどのようなものなのか、まずその実態を明らかにしたい。そこで「五柳先生伝」以前の自伝を、現存するものに限って時代順に列挙してみると、以下の通りである。<sup>(18)</sup>

- a 前漢・司馬遷『史記』「太史公自序」
- b 前漢・揚雄「自序」〔『漢書』「揚雄伝」〕
- c 後漢・王充『論衡』「自紀」
- d 後漢・班固『漢書』「叙伝」
- e 後漢・馬融「自叙」
- f 後漢・鄭玄「自序」
- g 魏・曹丕『典論』「自叙」
- h 魏・皇甫謐「自序」
- i 晋・葛洪『抱朴子』「自叙」

このうち a、b、d は、正史における伝である。次に c、i は、著書的一篇として附された自伝である。最後の e、f、g、h は、現在完全な形で伝わっておらず、他書のなかに引用され伝承された断片のものではあるが、その内容から判断すると、他の自伝と同様に自らの事跡等について記されたものと推測される。<sup>(19)</sup>

さて、右の九種に共通して、第一に篇名の類似を指摘できる。自伝は「自序」(a、b、f、h)「自叙」(e、g、i)とストレートに標題されることが強半を占め、「五柳先生伝」のように、あたかも第三者の名を冠する篇名は存在しない。

第二に、これらの自伝は、書物の一篇として相応の分量を有する。完全な形で伝わるもののうち、最も短いのは c の四二二字であるが、それでも、賛をも含めた本伝一七一字の約二・五倍に相当する。

第三に、断片しか伝わらないものを除くと、いずれもが本伝にない自身の姓氏、名字、籍貫や家系、経歴を具体的に記述している。例として本伝ともっとも制作年の近い『抱朴子』「自叙」を挙げよう。

抱朴子者、姓葛、名洪、字稚川、丹陽句容人也。其先葛天子、蓋古之有天下者也。後降爲列國、因以爲姓焉。……

抱朴子なる者、姓は葛、名は洪、字は稚川、丹陽句容の人なり。其の先は葛天子、蓋し古の天下を有つ者なり。後降りて列國と爲り、因りて以て姓と爲す。……

このように本伝とは異なり、自伝に必須の個人情報と備わっている。経歴についてはやや長い割愛するが、右の引用の後には、

祖先の経歴から葛洪自身の印象的な体験に至るまで詳細に記されている。<sup>(20)</sup>

また、本伝のように、終焉の時まで記述したのも存在せず、形式・内容、いずれの点から見ても本伝が伝統的な自伝と完全に異質であることはあきらかである。

### (三)「某々先生伝」の先例

つづいて、「五柳先生伝」という篇名に焦点を当て、類似の篇名をもつ先行作品と比較してみたい。それに該当する作品としては、漢・東方朔の「非有先生伝」がまず挙げられる。

「非有先生伝」は、遠路はるばる呉に仕えに来た非有先生が三年間、何も為すことなくうち過ごしているのを呉王が訝しく思い、その理由を問い詰めたところ、非有先生が君主のあるべき姿について持論を展開する、という構成をとる。非有先生は、その名がすでに非存在の架空の人物であることを表している。

ついで挙げられるのは、魏・阮籍の「大人先生伝」である。「大人先生伝」は、儒家的人物の大人先生が、世を避けて山林に隠棲する隠者と、易の思想にのっとり時運を待つ薪者と議論を交わして、その思想を披露する、という構成である。また、大人先生が非有先生と同様に架空の人物であることも、作中随所に見られる荒唐無稽な先生の描写から知ることができる。また「大人先生伝」は、「大人先生は蓋し老人ならん。姓字を知らず（大人先生蓋老人也、不知姓字）」という

書き出しが、「五柳先生伝」に酷似している。

しかし、この二作品は、「伝」を「論」に作るテキストの存在が示唆するとおり<sup>(21)</sup>、議論が主体の作品である。字数も「非有先生伝」が一千字以上、「大人先生伝」に至っては四千字を超える長篇であり、内容及び規模という点から、「五柳先生伝」が直接これらの影響を受けて成立したとは見なしがたい。

このほか「某々先生伝」という篇名をもつ作品となると、小川氏を始め近年の研究が等しくその影響を指摘する、嵇康や皇甫謐の『高士伝』が挙げられる。『高士伝』については、次項において「五柳先生伝」の後に続く「妙徳先生伝」と「五斗先生伝」と併せて少しく論じたい。

### (四)「某々先生伝」の系譜

「五柳先生伝」の直後には、宋・袁粲（四二二～四七八、字は景倩）の「妙徳先生伝」がある。「妙徳先生伝」は、一二五字からなる妙徳先生についての伝記で、まず「非有先生伝」や「大人先生伝」のような長篇ではない。そして、議論は交わされず、淡々と妙徳先生の人となり語られる点などは「非有先生伝」や「大人先生伝」よりも「五柳先生伝」に遥かに近い。

ところで、本節（一）においてすでに触れたように、『宋書』によれば、袁粲は嵇康の『高士伝』に倣って「妙徳先生伝」を書き、そしてそこに自らを擬えたのだという。

嵇康の『高士伝』（正確には『聖賢高士伝賛』）は現在、注釈や類書

の中に断片的に引用されるものしか残っておらず、全容を知る術がない。よって、袁粲の「妙徳先生伝」との関係を正確に分析することも困難である。しかし、司馬相如と井丹の二者は、伝・贊ともに揃い、比較的完全な形で伝わっている。今この数少ない材料を手がかりに考えると、司馬相如は、正史の『史記』と『漢書』がともに相当の字数を割いているのに対し（もつとも、その大半は彼の賦作品の引用による）、『高士伝』では、伝・贊あわせて二六〇字程度で記述されている。井丹の伝も二五〇字程度の分量に過ぎない。<sup>22)</sup>

また、嵇康の『高士伝』と相前後して作られた皇甫謐の『高士伝』<sup>23)</sup>を見ると、一篇の伝は概ね百数十から二百数十字で書かれ、比較的数字の多い前漢・摯峻<sup>しじゆん</sup>と後漢・夏馥<sup>かふく</sup>の伝でさえ、二四〇字と二八〇字である。先の「司馬相如伝」と「井丹伝」の字数と大差無いことを踏まえれば、おそらく、嵇康の『高士伝』も全体としては一篇がせいぜい数百字で記された伝記であつたと考えられる。すると、一二五字の「妙徳先生伝」は、常人と異なる妙徳先生の人となりの描写といい、形式的にも内容的にも嵇康の『高士伝』に似通うものとなり、先述の『宋書』の指摘は十分に可能性が高いものといえる。

さて袁粲「妙徳先生伝」につづくのは、初唐・王績（五九〇～六四四）の「五斗先生伝」である。「五斗先生伝」の制作の背景について、呂才（？～六六五）の「王無功文集序」<sup>24)</sup>を見てみたい。

性簡傲、飲酒至數斗不醉。常云、恨不逢劉伶、與閉戸轟飲。因

著醉郷記及五斗先生傳、以類酒徳頌。

性簡傲にして、酒を飲むこと數斗に至るも醉はず。常に云ふ、「劉伶に逢ひ、与に戸を閉ざして轟飲せざるを恨む」と。因りて「醉郷記」及び「五斗先生伝」を著し、以て「酒徳頌」に類す。

王績は「醉郷記」と「五斗先生伝」を著し、劉伶（生卒年不詳、魏晋間の人で竹林の七賢の一人）の「酒徳頌」（『文選』卷四十七）に擬えた、という。劉伶「酒徳頌」は「大人先生」の酒浸りの様を描くことを通して酒の功徳を賛美したものである。『文選集注』（卷九十三）<sup>25)</sup>は「大人先生」について呂向と陸善経の注を引き、「仮りて乱を為るなり（假爲亂也）」、「大人先生は自ら寄するなり（大人先生は自ら寄するなり（大人先生自寄也）」）として、劉伶自身が大人先生に仮託されていると解している。であれば、これを模した「五斗先生伝」も、登場人物の五斗先生に王績自身が仮託されていると見てよいだろう。ここで重要なのは、「五斗先生」はあくまで王績が仮託された存在であり、王績自身とはまた異なる人物である、ということだ。その傍証として、王績自身による墓誌銘の序文が参考となる。いま彼の「自作墓誌文」（『王無功集』卷五）の序を示すと、以下のとおりである。

王績者、有父母、無朋友。自爲之字曰無功焉。人或問之、箕踞不對。蓋以有道於己、無功於時也。不聽書、自達理、不知榮辱、不計利害。起家以祿仕、歷數職而進一階。才高位下、免責而已。天子不知、公卿不識、四五十而無聞焉。於是退歸、以酒徳遊於郷里。往往賣卜、時時看書。行若無所之。坐若無據。郷人未有達其意也。常耕東臯、號東臯子。身死之日、自爲銘焉。

王績は、父母有れども、朋友無し。自ら之が字を為りて無功と曰ふ。人或いは之に問ふも、箕踞して対へず。蓋し以て己に道有りて、時に功無ければなり。書を聞かずして、自ら理に達し、榮辱を知らずして、利害を計らず。家を起こして以て禄仕し、數職を歴て一階に進む。才は高く位は下なれば、責を免るのみ。天子は知らず、公卿は識らず、四五十にして聞ゆる無し。是に於いて退歸し、酒徳を以て郷里に遊ぶ。往往トを売り、時時書を看る。行きては之く所無きがごとく、坐しては扱る所無きがごとく。郷人は未だ其の意に達すること有らず。常に東臯に耕し、東臯子と号す。身死するの日、自ら銘を為る。

注目したいのは「常耕東臯、號東臯子」の部分である。王績は別号として「東臯子」にのみ言及し、「五斗先生」については一言もない。これはやはり、「五斗先生」が生身の自分の分身ではなく、あくまで仮託した架空の人物に過ぎないからであろう。

以上、陶淵明の「五柳先生伝」をめぐって、(一)～(四)の観点から考察した。まず、(一)において、「五柳先生伝」を陶淵明の自伝とし、「五柳先生」を陶淵明の別号と見なす根拠は、陶淵明自身の言説の中にも、同時代の言説の中にも、全く存在しないことを記した。(二)において、先行する自伝と比較し、形式・内容のいずれの点においても大きく異なり、やはり自伝とは見なし難いことを確認した。そして、(三)において、「某々先生伝」の篇名をもつ先行作品と比較し、虚構的要素が強いという共通項を有するものの、伝の字数という

点から、近年の指摘の通り、嵇康や皇甫謐の『高士伝』と類似性があることも高いことを再確認した。続く(四)において、「五柳先生伝」よりも成立が遅れる「妙徳先生伝」と「五斗先生伝」を採り上げ、両者がともに架空の人物を語った虚構性の高い伝であることを指摘した。これらに加え、前節で見た早期「別号表現」との相違をも勘案すれば、「五柳先生伝」は、むしろ『宋書』にいう「実録」(＝自伝)ではなく、あくまで架空の人物について語った虚構の伝記という結論になる。

## 五、別号文学の萌芽——虚構性の出現

この「別号文学」の祖ともいえるべき、陶淵明の「五柳先生伝」は、極めて特異な位相にある作品でもある。前節の各項で論述したとおり、この作品には、もともと作者の自伝として「誤読」されないための、表現上の仕掛けが幾つか明示的に施されていた。氏素性をまったく明かさないう点、終焉を明記する点、五柳先生＝作者という関係性が作品の内外でまったく示されない点がそれである。この仕掛けを素直に受けとめるならば、「五柳先生伝」はとうてい陶淵明の自伝などではなく、架空の人物の伝と見なすが、もつとも合理的解釈である。「五柳先生」が陶淵明の別号ではない以上、「五柳先生伝」も当然「別号文学」たりえないことになる。

しかし、現実はそのとは正反対の方向へと進出した。この作品を積極的に「誤読」しようとする読書史が、遅くとも『宋書』隠逸伝成立

の当初から始まったのである。

これは恐らく、彼の創り出した文学世界がそれを誘導したからである。陶淵明文学の特質について詳細に論じる余裕はないが、あえて大つかみに指摘するならば、彼の文学には、第一に隠逸（帰田）の志向と田園生活自足の傾向があり（「婦去来兮辞」「帰園田居五首」等）、第二に飲酒を酷愛する表現が多く（「飲酒二十首」「止酒」等）、第三に虚構を交えて自己を題材化する作例も少なくない（「形影神」「擬挽歌詩」「自祭文」）という三つの特質なり傾向なりが確実に存在する。

五柳先生を隠士と見なせば、この作品には、右の三つのうち、第一第二の特質・傾向がすでに客観的事実として備えられている。作品自体は非自伝の構えを示しているけれども、陶淵明文学のもつ第三の特質が、陶淵明文学に対し深い愛好や共感、さらには憧憬を寄せる同時代ないし後世の愛読者をして、陶淵明によって仕掛けられた非自伝としての装置を、いとも容易く取り外させ、進んで「誤読」させる力として作用せしめたのではないかと推測される。

陶淵明自身の思惑がどうであれ、彼の没後、「五柳先生伝」は、陶淵明の「実録」、すなわち自伝文学として読まれることが当たり前になっていくとき、「五柳先生」は陶淵明の別号として機能し始めていった。

では、本伝が「実録」とされることにはどのような意味があるのだろうか。それは別号史上それまでにない固有の二つの特質、すなわち①非自説開陳の用法と②「作者≠別号」という図式が確実に取り込まれていった点に集約されよう。そして、右の要素が、次に述べる通り、

唐代に「別号文学」が成立する下地を作ったと考えられる。

まず①は、唐代以降の「別号表現」がこの非自説開陳を基本として詩や賦といった新たな文体で使用されていった事実から、表現の幅を広げ、様々な文体への応用の可能性を示したと考えられる。

②は作者と別号の繋がりを曖昧にし、別号を作者と異なる存在のように描いていく手法を確立させた。ただし、完全に別個の存在ではないため、その本質は作品内の戯画化された作者ということになる。しかも、「五柳先生」が陶淵明の作り出した虚構の存在ということを踏まえると、この手法には、作者のかくありたい、かく見られたいとする理想や願望もこめられていると見てよい。たとえば盛唐・元結の「退谷銘」等がその傾向を示すほか、本伝の摸倣作品である中唐・白居易「醉吟先生伝」はその典型といつてよい。就中、北宋・歐陽修は、ほぼ全ての「別号表現」に上述の特徴が認められる。

このようにして「別号文学」成立の下地は整えられていった。かく「五柳先生伝」が「別号表現」の用法を拡充し、別号に濃厚な虚構性を付帯させた点に着目するならば、「五柳先生伝」は「別号文学」の鼻祖とも言うことが出来る。しかし、実際には「五柳先生伝」は「別号文学」とは無関係の作品である。すると、「別号文学」は「誤読」が生み出した文学現象とも言い換えられる。

## 六、おわりに

先秦から始まる別号の風習が、「別号表現」として顕現するのが、魏晋の頃、皇甫謐や葛洪の前後であり、それがさらに「別号文学」へと新たな発展の可能性を見せ始めたのが、晋宋の際、陶淵明の「五柳先生伝」ということになる。

本稿で対象とした魏晋南北朝の時代は、別号を称した人物も少なく、「別号表現」の用例も決して多くはない。なにより、詩という中国文学を代表する文体に、いまだその使用が確認されないこの時代の「別号表現」を「別号文学」とみなすことは難しい。しかし、すでに「五柳先生伝」は陶淵明の「実録」と見なされ、陶弘景の「別号表現」には新たな時代の芽吹きがあった。以上を要すれば「別号文学」の「萌芽」は魏晋南北朝の晋宋の時代に見いだすことが出来る。

そして、次の唐で「別号文学」はようやく花開くことになる。ただ、王績を初めとする初唐の「別号表現」は、なお質や数量の上で大きな変化はなく、まだ開花に至ってはいない。唐において真に「別号文学」と呼ぶべきものが誕生するのは、やはり盛・中唐まで待つ必要がある。唐以降の「別号文学」については別稿で改めて論じることとしたい。

### 注1)

『別号録』以前にも、南宋末期の人、徐光溥の『自号録』一卷（清・陸心源編『十万卷樓叢書』所収、のち商務印書館『叢書集成初編』所収）という別号の専著がある。この書は淳祐七年（一二四七）譚友聞の序を冠し、南北兩宋の代表的人物の別号を、「処士」「居士」「先生」……「莊」「村」「隱」等、呼称の別によって三十六に分類列記し、その他を雑類として収める。なお、『別号録』九巻は、別号の下の一文字を韻によって分類し、宋・金・元を一巻に一括し、残り八巻に明人の別号を掲載する。

(2) 四皓については皇甫謐の『高士伝』が「一曰東園公、二曰角（用）里先生、三曰綺里季、四曰夏黄公」（『叢書集成統編』藝文印書館）と四人の通称を挙げる。また、『史記索隱』の注は「陳留志曰、園公姓庾、字宣明、居園中、因以為號。夏黄公、姓崔名廣、字少通、齊人、隱居夏里修道、故號曰夏黄公。用里先生、河内軹人、太伯之後、姓周名術、字元道、京師號曰霸上先生、一曰用里先生」（『史記』卷五十五「留侯世家」中華書局一九五九年九月）と、四人のうち三人の姓字を記している。

(3) 別号の流行については、『自号録』（注一参照）という確認できるものでは最も古い別号の専著が南宋末に著された事実や、先述の『別号録』の序の「別號 盛于南宋、濫于明……」や、『文史通義』卷四の「而（趙）宋人又自開其織詭之門者、則盡人而有號、一號不止、而且三數未已也……」という指摘から宋代（特に南宋）から始まったとみなされる。

(4) 先述のとおり、宋代で隆盛する別号は、自号である。この特徴を備えたものとしては前述の范蠡の「鴟夷子皮」と「陶朱公」もあてはまるが、『史記』卷四十一「越王句踐世家」では、范蠡が「鴟夷子皮」と「陶朱公」を名乗ったことを「号」ではなく、「謂」とあらわしている。対して第三章で挙げる皇甫謐以下の魏晋南北朝の諸人に対し、正史はみな例外なく「号」という字を使用していることから、前漢においては別号の文化はまだなかった可能性がある。また、『自号録』（注一参照）の分類に従うと「鴟夷子皮」と「陶朱公」は「雜類」に分類されてしまい、宋代の一般的な自号の祖型とみなせないこと、そして、皇甫謐までの間に自号の例の見当たらないことなどを鑑みて范蠡を自号の祖とせず、

確實な例として皇甫謐をそのはじまりとした。

- (5) 次に挙げる皇甫謐、葛洪のほか、嵇含は『晋書』卷八十九「忠義伝」（中華書局 一九七四年十一月）に「含好学能屬文。家在鞏鼎亳丘、自號亳丘子……」とあり、陶弘景は『梁書』卷五十一（中華書局 一九七三年五月）に「……乃中山立館、自號華陽隱居。」とある。
- (6) 上海古籍出版社 一九八六年八月
- (7) 『抱朴子外篇校箋』中華書局 一九九一年十二月
- (8) 『篤終論』、『帝王世紀』「漢高祖論」及び「光武論」、『列女伝』「龐娥親論」（いずれも嚴可均『全晋文』卷七十一 商務印書館 一九九九年）
- (9) 「肘後略急方序」『養生論』『抱朴子』（『太平御覧』等）にみえる佚文を含む。『全晋文』卷一一六及び一一七、『抱朴子』は『抱朴子内篇校釈』中華書局 一九八五年三月、『抱朴子外篇校箋』中華書局 一九九一年十二月を参照した。
- (10) 「授陸敬游十賚文」『答朝士訪仙仙兩法体相書』「本草序」『肘後百一方序』（嚴可均『全梁文』卷四十六及び四十七 商務印書館 一九九九年）
- (11) 自ら別号を称すことは隠士であることの表明で、そのためには称する所の別号が自身を表しているという関係性も自明でなくてはならない。つまり、この書き出しは別号が指向する効用と相反しているといえ、本伝を「実録」とした場合の不都合の一つとみなせよう。
- (12) 「以此自終」という記述が問題視されないのは、陶淵明に自身の臨終を想像して書いた「自祭文」があるからと考えられる。
- (13) 小川環樹「五柳先生伝」と「方山子伝」（『小川環樹著作集』第三卷 筑摩書房 一九九七年三月）論文の初出は早稲田大学中国古典研究会「中国古典研究」第十三号 一九六五年十二月。
- (14) 「淵明の場合も、その隠士としての処世術全体に、皇甫謐の行きかたがうかがわれるが、具体的に著作の面に於いて『五柳先生伝』に『高士伝』の影響が見られることが指摘される。これについては小川環樹氏の論文に触れてある。『五柳先生』自体の発想がおそらく『高士伝』中の人物より出ていること、『高士伝』によく見える「不知何許人」という表現をそのまま借用していること、『高士伝』中に見える黔婁の言
- を賛に引用していること、その他「以此自終」（韓順伝）、「環堵蕭然」（原憲伝）「不慕榮利」（巢父伝他）、「短褐穿結」（管寧伝）などの語句の類似が見られること（括弧内はその出典、などの点がそれである。）、（陶淵明とその時代）第三章「隠士陶淵明」研文出版 一九九四年四月）
- (15) 「書物の中の自序の中で自分自身の生を書くこと、實在にせよ虚構にせよ他者の伝を書きながらそこに自分の願望、理想を反映させること、こうしたエクリチュールが魏晉までそろったところで、それを受けて出現する『五柳先生伝』には、上の三つの要素が混然と一体化しているかみえる。つまり『五柳先生伝』が対象とする人物は、虚構性と實在性を同時に備え、自己の伝でありつつそれを他者として記述し、作者自身の生活の事実に沿いつつ同時に理想・願望の実現でもあるというように、三者の要素がすべて溶け込んでいるのである。こうして『五柳先生伝』が登場することになった。」（『中国の自伝文学』Ⅲ「かくありたい我れ」創文社 一九九六年一月）
- (16) 「ただしこの特異な書き出しは、淵明の独創によるものではない。すでに漢の劉向の作とされる『列仙伝』や、晋の嵇康（二二三—二六二）や皇甫謐（二一五—二八二）の編とされる『高士伝』の類に、似た表現が少なからず見られるからである。」（『海知義著作集二』「陶淵明——虚構の詩人」二五柳先生伝——架空の自伝 二〇〇八年五月【初出は『陶淵明——虚構の詩人』岩波新書 一九九七年】）
- (17) 于潮「互文的歴史・重讀『五柳先生傳』」（『古典文献研究』第十五輯 二〇一二年七月）。木東波「詩與雜傳——陶淵明與魏晉『高士伝』——」（『東方學報』第九十三冊 二〇一八年十一月）
- (18) 整理に当たっては、注(15)の川合氏の著書を参考にした。
- (19) 馬融の「自序」は『世說新語』文学篇（『世說新語校釈』上海古籍出版社 二〇一一年十二月）の劉孝標の注に、鄭玄「自序」は劉知幾の「孝經老子注易伝議」（『文苑英華』卷七六六 華聯出版社 一九六五年）に、曹丕「典論」「自叙」は『三國志』卷二「文帝紀」（中華書局 一九五九年十二月）の終わりの裴松之の注にそれぞれ確認できる。
- (20) 『抱朴子』「自叙」の詳細については注(15)の川合氏の論著に詳しい。

また、本著は司馬遷、王充、曹丕の自伝についても一節を割いている。そして、書物の序としての「太史公自序」が「自伝」的な印象を受ける要素に①家系・祖父、②自分の誕生、③修学、④履歴・官歴についての記述のあることを挙げ、その後の書物の自序にも繁簡の差異はあれ、概ね上記の要素を備えていると指摘する。反対にこれらの要素を欠く「五柳先生伝」は印象として非自伝的ということになる。

(21) 「非有先生伝」は、『漢書』卷六十五「東方朔伝」(中華書局 一九六二年六月)で「非有先生之論」と記され、また『文選』卷五十一も「非有先生論」としている。「大人先生伝」についても、『世説新語』棲逸篇に附された劉孝標の注に「竹林七賢論に曰く、籍 帰り、遂に大人先生論を著す(竹林七賢論曰、籍帰遂著大人先生論)」とある。

(22) 嵇康『聖賢高士伝贊』(叢書集成続編『藝文印書館』)による。  
(23) 石川氏は嵇康と皇甫謐の『高士伝』が制作された時期について、嵇康が皇甫謐より二十年早く没し、その頃の皇甫謐がまだ重要な地位にいないことなどから、嵇康が先に『高士伝』を作っていたと考えるのが妥当であるとしている。(『陶淵明とその時代』第二章「陶淵明の帰田」)

(24) 『王無功集』上海古籍出版社 一九八七年十一月  
(25) 『京都帝国大学文学部景印旧鈔本』第九集 一九四二年六月